

Title	パン・アフリカニズム運動と第六回パン・アフリカ会議
Sub Title	The Pan-African Movement and the Sixth Pan-African Congress
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1983
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.56, No.3 (1983. 3) ,p.437- 454
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	内山正熊教授退職記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19830328-0437

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パン・アフリカニズム運動と

第六回パン・アフリカ会議

小 田 英 郎

はじめに

- 一、第六回パン・アフリカ会議の概要
- 二、第六回パン・アフリカ会議の系譜的位置づけ
- 三、第六回パン・アフリカ会議と合衆国の黒人運動
- 四、結 び

はじめに

この小論は、第六回パン・アフリカ会議の概要を明らかにするとともに、パン・アフリカニズム運動史における同会議の意義について論ずることを目的とするものである。

第六回パン・アフリカ会議は、一九七四年六月十九日から二十七日にかけてタンザニアの首都ダルエスサラームで開催さ

パン・アフリカニズム運動と第六回パン・アフリカ会議

四三七 (六八五)

れた。第五回パン・アフリカ会議がマンチェスター(イギリス)で開催されたのが一九四五年十月であるから、第六回パン・アフリカ会議の開催までに、二九年ものブランクがあつたことになる。このように長いブランクのうちに、しかもいささか唐突に、パン・アフリカ会議が開催されたという事實は、さまざまの意味でまことに興味ぶかい。

第一に、第六回パン・アフリカ会議はなぜ二九年もたつてから復活したのか、という問題がある。この問題は、タンザニアのニエレレ (Julius Kambarage Nyerere) 大統領がなぜ第六回パン・アフリカ会議を主催したのか、という問題と、重なる部分をかなりもつている。これらの設問は、いわばパン・アフリカニズム運動の系譜のなかで、第六回パン・アフリカ会議をどう位置づけるべきかという問題のなかに含めて考えればよいであろう。

第二に、この第六回パン・アフリカ会議が一九六〇年代後半以降のアメリカ合衆国でアフリカ系人(黒人)のあいだに徐々に復活していったパン・アフリカニズム志向と、どういう関係にあるのか、といった問題がある。合衆国では、一九三〇年代初期以降急激に弱まつたパン・アフリカニズム志向が、一九六〇年代後半におけるブラック・パワーの高揚とともに徐々に復活しはじめ、一九七〇年九月三〜七日にはジョージア州アトランタで、第一回現代パン・アフリカ会議 (1st Modern Pan-African Congress) とも別称されるアフリカ系人民会議 (Congress of African Peoples) が開催され、黒人の解放とアフリカの解放とを同次的に考えるべきことが改めて確認されているのである。⁽¹⁾ 合衆国に再生したこの新しい「パン・アフリカニズム的」運動と、第六回パン・アフリカ会議とが関係をもつていであろうことは十分に推測しうるが、その関係がどの程度のものかは、事実関係に照して考察する必要がある。

第三に、第六回パン・アフリカ会議がパン・アフリカニズム運動の新段階を画するものであるかどうか、という問題がある。この問題は、過度にアフリカ化されてしまった第二次世界大戦後のパン・アフリカニズム運動を是正あるいは修正する⁽²⁾ ような役割を、この第六回パン・アフリカ会議がはたしているかどうか、という観点から説明されるべきものであろう。

本稿では、以上のような諸問題を念頭におきながら、第六回パン・アフリカ会議の概要を明らかにし、パン・アフリカニズム運動史における同会議の意義を論ずることにしたい。

(一) 1958年11月1日 Imamu Amiri Baraka (ed. With an Introduction by), *African Congress: A Documentary of the First Modern Pan-African Congress*, New York: William Morrow & Co., 1972, pp. vii-viii を参照された。

(二) 筆者はかつて、「第六回パン・アフリカ会議の概要とニエレレ大統領の開会演説」『法学研究』四八巻七号、昭和五〇年七月」と題する一文(資料)として類別されている)のなかで、以上のような問題点を指摘したことがある。

一、第六回パン・アフリカ会議の概要

第六回パン・アフリカ会議は、前述のように一九七四年に六月十九日から二十七日にかけて、タンザニアの首都ダルエスサラームで開催された。会場がダルエスサラーム大学のクワメ・エンクルマ講堂であったことは、この会議にまことにふさわしかった。なぜなら、ガーナの元大統領クワメ・エンクルマ (Kwame Nkrumah) こそは、二九年まえにマンチェスターで開催された第五回パン・アフリカ会議の書記として同会議を事実上指導し、その後一九六〇年代初期にいたるまでパン・アフリカニズム運動のトップ・リーダーとして大きな役割をはたした人物だったからである。

第六回パン・アフリカ会議の参加者は、アフリカ諸国、カリブ海諸国、アメリカ合衆国、イギリス、太平洋諸国など二九カ国の代表および少数白人支配のもとに置かれている南部アフリカやポルトガル植民地で闘っている八つの解放組織の代表、さらにはパレスチナ解放機構 (PLO) の代表など、総計約五〇〇名を数えた⁽¹⁾。会議は主催者であるニエレレ大統領を会長に、同じタンザニアの副大統領ジュンベ (Aboud Jumbe) を議長に、合衆国の代表コックス (Courtland Cox) を書記長に選出し、ニエレレ大統領の開会演説をもつて九日間にわたる討議の幕が切つて落された。

ニエレレのこの開会演説は、ギニアのセク・トゥーレ (Amed Sékou Touré) 大統領から送付された録音演説とともに、

「この会議の活動ならびに討議の基礎をなすもの」として位置づけられた(『ブレザンス・アフリケーヌ』誌)⁽²⁾ということであるから、いわば「基調演説」としての役割を担っていたのであろう。両演説を比較すれば、会議の会長に任ぜられたニエレの演説の方が当然ながら重きをなしたのであるが、その内容を見ると、アフリカ人や全世界のアフリカ系人が当面している問題や課題を、単にアフリカ問題や黒人問題として限定的にとらえるのではなくして、人間一般の問題としてこれを把握し、それを解決するために世界的規模の運動を形成、発展させようという、ニエレの普遍主義志向がかなり顕著に出ていることがわかる。それはたとえば、「したがってわたくしの意見では、この会議の目的は、あらゆる地域の人種主義、植民地主義、抑圧、搾取に反対する手段を討議し、さらにいつそう前進することである。われわれの討議は、過去および現在におけるわれわれ自身の経験に、特別の注意を払いつつおこなわれるであらう。しかし同時にわれわれの討議は、人間の平等と民族自決を目指す世界的規模の運動の文脈のなかでおこなわれねばならない」という、ニエレの開会演説の一節にも、はつきりと読みとることができる。ニエレは、演説の前半部分で過去のパン・アフリカ会議が果たした役割について最大級の賛辞を繰り返し、アフリカ人、アフリカ系人の解放に対するその貢献を称揚しながらも、この第六回パン・アフリカ会議がもはやアフリカ人、アフリカ系人だけの(あるいは黒い肌をした人びとだけの)問題を討議する場にとどまってはならないということ、再三再四述べている。たとえば「もしわれわれが自分たちを、人類の残余の人たちと異つた存在とみなすことによつて、黒人としての自己の立場を引き続き擁護すべしという方向に立ちもどるならば、われわれはみずから弱体化させることになるであらう……。人間の平等を目指す闘争は、いまや世界的規模で展開されている。抑圧はかならずしも皮膚の色に基くものではない。……自分たちがそれに苦しんでいたがゆえに抑圧に反対することを学んだわれわれは、みずからの権利のために一致団結して闘っている他の人びとに對して、全面的支持をあたえることを期待——まさしく期待——されるであらう。われわれはこれまで支援を求めてきた。われわれは支援をあたえる用意がなければならぬ」という言葉も、

そうしたニエレレの姿勢を物語っている。

同じ基調演説ではあつても、トゥーレのそれは、ニエレレの演説ほど普遍主義に傾斜してはいなかつたように思われる。本稿執筆の時点でトゥーレの録音演説の全文を入手しえないでいるため、詳細は分らないが、タンザニアの『デイリー・ニューズ』紙(六月二十一日付)の記事を要約・転載した『アフリカ・リサーチ・ブレティン』誌(一九七四年七月十五日刊)の記事から判断するかぎり、トゥーレは一方において、「皮膚の色などという静的な要素は、人間の行動や能力とは無縁のものである。人間は、より公正な社会を創り出すためのたゆまざる努力によつて判断、評価されるべきものである」とか、あるいは「フィデル・カストロ (Fidel Castro Ruz) やサルバドル・アジエンデ (Salvador Allende Gossens) は、大衆の利益を裏切つた」、三のアフリカ人指導者やアメリカ黒人よりも人ほるかにわれわれの兄弟である」といつた表現で、アフリカ性とか黒人性を超越しようとする姿勢をうかがわせながら、他方で「パン・アフリカニズムは歴史の主体たろうとするアフリカ人の決意を具体化しなければならない」とか、「われわれの文化革命は、われわれ自身を再度アフリカ化し、再人間化しようとする革命の原動力でなければならない」とかいつた言葉にも示されているように、アフリカ性への傾斜をかなりみせているのである。⁽⁵⁾

このように、微妙にトーンの違いこの二つの演説を、参加した代表たちの投票によつて基調演説として採択したことは、第六回パン・アフリカ会議がその出発点からあまり厳密な自己規定をおこなうことには、あえてこだわらなかつたことを物語っているのかもしれない。

ところで、ニエレレの開会演説およびトゥーレの録音演説という二つの基調演説のあとを受けて、あつたように討議が進められたのかは、詳細には分らない。『ブレザンス・アフリケーヌ』誌によれば、討議の主要なポイントは、(a)植民地主義、とくに南アフリカ、ローデシア、およびポルトガル支配地域の植民地主義に対する闘争、(b)アフリカ大陸におけるあら

ゆる形の国際的帝国主義(新植民地主義、人種主義、外国の軍事基地、等々)に対する闘争、(c)合衆国、ヨーロッパ等における黒人少数者の闘争に対しての積極的支援、の三点であつたといふことである。⁽⁶⁾さらに同誌が付言しているところによれば、民族解放運動の代表が多数参加していたこともあつて、(a)の論点はいつそう重視されたのであつた。また(b)について同誌は、「会議は、(国際的帝国主義に対する)この闘争が階級的基礎(等しく国家的レベル、国際的レベルで)に立つておこなわれべきことを強調する必要があると感じた。……この点こそは、熱のこもつた討議、論争をひき起こした唯一の論点であり、それがために多くの時間が費やされ、第一委員会の仕事を遅らせる結果を生じた。ある代表は、それがイデオロギー的な意味を含んでいるように感じられるといふことで、《階級闘争》の概念に留保をつけるむね表明した」と述べている。また、(c)の点については当然ながらアメリカ黒人の代表がこれを重視し、その面でパン・アフリカニズムに大きな期待を寄せざるむね表明した、ということも同誌によつて指摘されている。⁽⁷⁾

以上に述べた『プレザンス・アフリケーヌ』誌による、討議の論点の紹介は、おおむね正確であるように思われる。さらに、植民地主義(とくに南部アフリカやポルトガル領アフリカ)に対する闘争は、民族解放運動の代表たちをもつとも強調した問題点であつたといふ指摘は、たとえばモザンビーク解放戦線(FRELIMO)副議長ドス・サントス(Marcelino dos Santos)の「FRELIMOはいかなる犠牲をはらつてもポルトガルと最後の最後まで闘う。モザンビークの勝利はブラック・アフリカのすべての人びとの勝利を意味する。……モザンビークの闘いは、搾取体制の破壊と、平等に基く新秩序形成を目指す革命である」といふ演説や、ジンバブウェ・アフリカ民族同盟(ZANU)議長チテポ(Herbert Chitepo)の「帝国主義に対するグローバルな攻撃戦略はアフリカの民族解放運動に対する物質的援助の供与を含むはずである」といふ演説の一節によつて、間接的に裏書きされているといえよう。⁽⁸⁾また「合衆国、ヨーロッパ等における黒人少数者の闘争に対しての積極的支援」といふ問題に関してアメリカ黒人の代表からきわめて積極的な要望がおこなわれたといふ点についても、たとえば

『アフリカ・リサーチ・ブレティン』誌が第六回パン・アフリカ会議の主要な演説のひとつにあげているベネット (Lurone Bener) のそれを見れば納得がいく。合衆国の著名な黒人誌『エボニー』(Ebony) の編集人であり、キング牧師 (Martin Luther King, Jr.) の伝記の著者でもあるベネットは、「全世界の黒人が威信をとりもどすためには、アフリカの全面解放が必要不可欠である」と主張し、さらにアフリカにおける被圧民族の闘争を白人からの圧迫に対する合衆国黒人の闘争と等置したうえで、「アフリカを搾取する政策をとっているあらゆる国に対して、合衆国の黒人は反対する」と明言したのであつた。⁽⁹⁾ もつとも、合衆国の(黒人)代表の立場がすべて右のベネットの演説に集約されていたわけではない。たとえば、同じ演壇に立つたバラカ (Imamu Amiri Baraka 本名レロイ・ジョーンズ = LeRoi Jones) やサドウカイ (Owusu Sadaukai 本名ハワード・フラー = Howard Fuller) のように、社会主義革命の枠内での黒人の解放を強調する人びとも、合衆国(黒人)代表のなかに含まれていたのである。

ところで、前述のような(a)(b)(c)の諸問題に論点を絞りながら、第六回パン・アフリカ会議の討議は整然と進行したのかというと、かならずしもそうではなかつたようである。たとえば、会議を取材した合衆国の黒人運動家兼ジャーナリスト、アルマ・ロビンソン (Alma Robinson) によると、「会議は全体としてあまり生産的でもなく実質的でもなかつたという印象であるらしい。彼女はこう言っている。

「会議の最初の二日間には手続き問題に終始した。つぎの四日間は、各代表が全議場にむかつて演説をする機会をえた。そして、パン・アフリカニズムの英雄たちをほめたたえ、南部アフリカの解放運動を鼓舞、激励し、パン・アフリカの哲学を称揚する言葉が、小さな瀧のようにほとばしり、会議が当面している実質的な諸問題は、その激流のなかで溺れてしまった」⁽¹¹⁾。

ロビンソン自身、合衆国黒人運動家の視点から第六回パン・アフリカ会議を取材したであろうから、右の論評はかならずしも客観的ではないかもしれないが、大筋においては正確であらうと思う。当面している問題状況がさまざまに異なつてい

る国や地域の代表が、二九年ものブランクのうちに突然パン・アフリカ会議の名において結集しようとしても、具体的な問題について、意味のある合意を生みだすことなど、もともと望むべくもないのである。

結局第六回パン・アフリカ会議は、「一般宣言」、「経済宣言」、「文化宣言」その他多数の決議を採択して、六月二十七日にその幕を閉じた。いささか素朴にすぎる方法かもしれないが、ここで「一般宣言」を素材として、第六回パン・アフリカ会議の性格を照射してみることにしよう。「一般宣言」は前文とその他五つの部分から構成されているが、第一の部分、第二の部分は過去のパン・アフリカ会議およびパン・アフリカニズム運動の回顧であり、第三の部分は第六回パン・アフリカ会議および現代のパン・アフリカニズム運動の位置づけであり、第四および第五の部分はいわば現代パン・アフリカニズム運動が担うべき課題やよつて立つべき原理の列挙である⁽¹²⁾。

このうちで注目を引くのは、第六回パン・アフリカ会議と現代パン・アフリカニズム運動の位置づけを試みた第三の部分であつて、ここでは「パン・アフリカ運動は基本的に植民地人民の解放および抑圧された人民や諸階級の解放のためのダイナミックな力でなければならず、解放は必然的に搾取システムの原因の根絶と、搾取されてきた勤労大衆の権力に基礎を置いた社会の建設を意味する」という運動の本質規定につづいて、「第六回パン・アフリカ会議開催の歴史的文脈は、マンチエスター会議が開かれた一九四五年当時の歴史的文脈とはまさしく根本的に異なつてゐる。第二次世界大戦後、広範にして力強い社会主義陣営が世界に登場し、帝国主義の世界支配の要求と闘う強い力となつてゐる。……一口で言えば、わが会議は地域レベル、国際レベルで民族解放運動および階級闘争が高揚している時期に開催されてゐるのである」という表現で第六回会議の意義が語られてゐる⁽¹³⁾。

こうした運動の性格規定、会議の意義づけから判断するかぎり、パン・アフリカニズムの戦闘性、急進性が前面に押し出されているように受け取れるし、事実これを受けて「一般宣言」の後半には「革命的パン・アフリカニズム」(Revolutionary

Pan-Africanism) という用語が頻繁に登場する。いわく、

「革命的パン・アフリカニズムは階級闘争の文脈のなかでみずからをしるすものである」

「革命的パン・アフリカニズムは、いまや世界革命および普遍的進歩に対して、その独自の豊かな貢献をはたすことができる」など。⁽¹⁴⁾

このあと、「一般宣言」はその末尾で「緊急に達成」必要な「九目標概要」として知られるようになる。活動目標を明示するのであるが、その要点は以下の通りである。

- (a) 最後の植民地体制、人種主義体制の基地を破壊することによつて、アフリカにおける外国支配に終止符を打つこと。
- (b) いまなお植民地主義をばびこらせているような体制を脱却すること。
- (c) アフリカ諸国にある外国の軍事基地を撤去すること。
- (d) アフリカの諸人民、アフリカ人の子孫である諸人民、およびすべての人民の統一を強化すること。
- (e) アフリカおよび世界のすべての進歩的勢力に対して、アフリカの内外の解放運動に政治的、物質的援助をあたえるよう訴えること。
- (f) 革命的パン・アフリカニズムの戦略は、基本的には反帝国主義的、反植民地主義的、反新植民地主義的、反資本主義的な闘争の枠組において、平等と民主主義を推進し、新しい社会を發展させる手段となるよう配慮するかたちで、規定されるものである。
- (g) 反帝国主義闘争という共通の目標に基礎を置いて、革命的パン・アフリカニズムは世界中のそのさまざまな構成勢力がもつ、組織上、戦術上の特殊性を考慮に入れるものである。
- (h) 一九七四年というこの年、パン・アフリカニズムは諸人民によるみずからの尊厳と責任の完全な回復、全社会および全人類の根本的改造、人間の完全な發展ならびに社会主義社会の建設を目指すものである。
- (i) それゆえパン・アフリカニズムはすべての人種的、部族的、種族的、宗教的、民族的考慮を排除する。パン・アフリカニズムは世界のすべての被抑圧人民の運動を受け入れ、世界中のあらゆる反動勢力に反対する。⁽¹⁵⁾

この「九目標概要」もまた、戦闘的、革命的用語に満ち満ちている点では、「一般宣言」の他の部分にひけをとらない。ところで、このように見てくると、第六回パン・アフリカ会議がいちじるしく急進的、革命的ムードに支配されていたよ

うに感じられるが、実際にはたしてそうであつたかどうかは疑わしい。というのは、この会議に関するいく種類かの報道を検討してみると、一口に参加者といつても、政府代表団と民間代表団とのあいだには、その姿勢の点で少なからざる違い、ないしはギャップがあつたように受け取れるからである。一般的に言えば、タンザニア、ギニアなど若干の例外を除けば、政府代表団がより穏健かつ現実主義的であつたのに対して、民間代表団はより急進的、革命的、イデオロギー的であつた。しかも代表団総数に占める比率から言えば政府代表団（主としてアフリカ、カリブ海諸国の代表団）の方が多かつたのであるから、会議のムードは、むしろ保守的になりがちなかれら政府代表団の態度を反映しがちだつたのではないかと思われる。事実ロビンソンの報道によると、会議の主宰者であるニエレレは記者会見で不満の色をかくさないアメリカ（黒）人をまえにして、つぎのように釈明した。

「アフリカ人はそれぞれ政府を代表しているために、決定をすることに非常に臆病になつて居るのです。われわれが会議を開いたときは、われわれは最小限の合意をするだけです。われわれが最大限の合意をしたことはいまだかつてありません⁽¹⁶⁾」

さらに「われわれの会議」なるものの具体例として、ニエレレはOAU（アフリカ統一機構）を挙げ、「OAUはこれまで抜本的な変革への期待にほとんど応えたことがないむね説明した⁽¹⁷⁾」（ロビンソン）ということである。

このニエレレの談話は、会議のムードについての前述の推測にひとつの根拠をあたえると同時に、ニエレレ自身のOAUに対する不満をおしはかる材料にもなる。そして、次章でも触れるように、こうしたOAUに対する不満こそが、ニエレレをして二九年ぶりのパン・アフリカ会議を開催せしめるにいたつた主要な動機のひとつであらうと考えられるのである。

いずれにせよ、このように第六回パン・アフリカ会議では保守的な傾向の強い政府代表団が数のうえで多かつたために、宣言や決議のような抽象的なレベルでは急進的、戦闘的、革命的な主張の大部分がそのまま認められたが、それを具体化する問題については、ほとんど見るべき成果を挙げえなかつた。たとえば、第七回パン・アフリカ会議の日程や開催地を決め

る問題、パン・アフリカ会議の常設機関を設立する問題などは、提起されたが可決されなかつた。とくに後者の問題については、アフリカ諸国の代表団が消極的な態度を示した。この点についてのアサンテ (S.K.B. Asante) の「ダル(エスサラーム)会議に対して向けられうるもつとも重大な批判は、それが活動のもとになる機構的枠組を作らなかつたということである」⁽¹⁸⁾ という論評は、まさに正鵠をえていたのであつた。

しかし、右のような不満を残したとはいえ、第六回パン・アフリカ会議はパン・アフリカニズム運動の現代的再確認を旨とした画期的な会議であり、一九六三年五月のOAU成立以来もつばらアフリカ大陸の問題だけにかかわつてきたパン・アフリカニズムを、より広い第三世界的な視野に立つた運動へと発展させるきつかけを生みだそうとした会議として、注目されてしかるべきものであつたことは、否定できない。

- (1) *Africa Research Bulletin, Political, Social and Cultural Series* (以下ARB), Vol. 11 No. 6 (July 15, 1974), p. 3261.
- (2) Society of African Culture, "The Sixth Pan-African Congress," *Présence Africaine*, No. 91 (Trimestre 1974), p. 12.
- (3) 「第六回パン・アフリカ会議におけるニヘレン大統領の開会演説」小田「前掲資料」一〇九ページ、上段。
- (4) 同資料「一〇八ページ、上〜下段。
- (5) ARB, Vol. 11 No. 6, p. 3261.
- (6) Society of African Culture, *op. cit.*, p. 178.
- (7) *Ibid.*
- (8) ARB, Vol. 11 No. 6, pp. 3261~2.
- (9) *Ibid.*, p. 3261.
- (10) *Ibid.*, p. 3262.
- (11) A. Robinson, "Sixth Pan-African Congress : Africa and Afro-America," *Africa Report*, Vol. 20 No. 5 (September-October 1974), p. 10.
- (12) 一般宣言 (General Declaration) の全文は前掲の *Présence Africaine*, No. 91, pp. 204~11 (公文) 〃 pp. 212~9 (英文) に収録されている。

- (13) *Ibid.*, p. 215.
- (14) *Ibid.*, pp. 216~217.
- (15) *Ibid.*, pp. 218~219.
- (16) Robinson, *op. cit.*, p. 8.
- (17) *Ibid.*
- (18) S. K. B. Asante, "Sixth Pan-African Congress : Re-Birth of Pan-Africanism," *Africa*, No. 37 (September 1974), p. 30.

二、第六回パン・アフリカ会議の系譜的位置づけ

前章で概述したようなかたちで進められた第六回パン・アフリカ会議は、過去のパン・アフリカニズム運動のどの部分につながるであろうか。むろんこの会議が、一九一九年(パリ、第一回)、一九二二年(ロンドン、ブリュッセル、パリ、第二回)、一九二三年(ロンドン、リスボン、第三回)、一九二七年(ニューヨーク、第四回)、一九四五年(マンチエスター、第五回)と続いたデュボイ(W.E.B. DuBois)流のパン・アフリカ会議運動を引き継ぐかたちで開催されたことは、「第六回パン・アフリカ会議」という名称を採用していることから明らかであるが、それでは一九四五年度の第五回パン・アフリカ会議以後の「アフリカ化された」パン・アフリカニズム運動の発展を、この第六回会議はどう評価しているのであるか。⁽¹⁾

この点については、ニエレレの開会演説が判断の材料としてかなりの意味をもつていえると考えられる。とくに、開会演説が、独立アフリカ諸国会議や全アフリカ人民会議さらにはOAUをどう評価しているかが問題である。なぜなら、当時独立したばかりのガーナの首相(のち大統領)エンクルマの招請によつて一九五八年四月にアクラで開催された独立アフリカ諸国会議(一九六〇年六月にはアジス・アベバでも開かれた)は「事実上の第六回パン・アフリカ会議」とさえ評された注目すべきイベントであつたし、同年十二月にこれまたエンクルマの招請によつて所も同じアクラで開催された全アフリカ人民会議(その後

一九六〇年一月にチュニス、一九六一年三月にカイロでも開かれた)は「パン・アフリカ諸会議の真の後継的会議」(I・ウォラースタイン)と評価されたほどの重要な会議であつたからである。また、一般にOAUが全アフリカの規模をもつたパン・アフリカニズムの嫡出子の組織とされていることは、あらためて言うまでもない。

ところが、ニエレレは開会演説の前半のかなりの部分をパン・アフリカニズム運動史の回顧にあてながら、独立アフリカ諸国会議には一言もふれていない。全アフリカ人民会議については、「完全な参加はアフリカの住民だけに限られはしたものの、それがヨーロッパ系やインド系のアフリカ人はもちろん北アフリカからの代表も含んでいたという点で、重要な会議であつた」⁽⁴⁾と述べている。すなわち、全アフリカ人民会議の意義は、正式代表をブラック・アフリカだけに限定せず、全アフリカに拡大したところにある、といわんばかりであつて、会議の本質的な部分の評価は避けているように思われる。

またOAUについては、開会演説は、それが過去のパン・アフリカ会議によつて基礎を築かれたものであることを指摘したうえで、「統一の教訓を最初に学び、実践し、そして教えたのは、実にこれらの人びと(過去のパン・アフリカ会議に集まつた黒人男女——小田註)であつた。アフリカの人民はその教訓を吸収した。OAUはその成果のひとつである。OAUは黒人の機構ではない。それは、あらゆる皮膚の色をした人びとを包摂する機構である」⁽⁵⁾と述べている。つまり、ここで演説が強調しているのは、OAUが皮膚の色を超えた、あるいは、非黒人を含めた大陸的統一機構だという点なのであつて、その点こそが評価の対象とされるべき部分である、と主張しているように読みとれるのである。

別の言い方をすれば、パン・アフリカニズムがパン・ネグロイズムやブラック・インターナショナルイズムといった人種的枠組を超えた、より広範な被抑圧民族のイデオロギー運動へと発展していく過程を想定し、その一里塚としてのOAUを評価するという立場を、ニエレレの演説はとつているように思われるのである。

このようにニエレレは一応はOAUを評価してはいるが、それはプラスの評価ではあつても、あまり積極的な評価とは言えない。それどころかむしろOAUに対してニエレレは、それがアフリカ諸国の政府代表からなる保守的な性格の地域機構であつて、パン・アフリカニズムの唯一・正統的な組織というのにふさわしくない、という厳しい見方をしているように思われる。そうしたニエレレの姿勢は、前章で引用、紹介した、記者会見でのニエレレの言葉にもうかがうことができる。實際、第五回パン・アフリカ会議(一九四五年、マンチェスター)が設定した戦闘的、革命的路線を放棄し、エンクルマ等が目指した「アフリカの政治統合」を事実上完全に棚上げしたかたちでOAUが組織され、そのままの姿を維持してきたことについて、ニエレレはむしろ批判的になつていくという印象を受ける。そうであるとすれば、ニエレレは一九五〇年代末期以降の、そしてとくにOAU創設(一九六三年五月)以降のアフリカにおけるパン・アフリカニズムの展開そのものをあまり評価していないのではなからうか。なぜなら、この時期のパン・アフリカニズム運動は、独立期アフリカの統一のイデオロギー運動として過度にアフリカナイズされ、欧米世界、カリブ海地域など非アフリカ世界のアフリカ系人を切り離れたかたちで発展し、アフリカのパロキアリズムともいふべき偏りをもちすぎてしまつた、とも言えるからである。

しかも一九五〇年代末期から六〇年代初期の「アフリカの独立の時代」がすぎ去ると、それは第五回パン・アフリカ会議当時の革命的性格を喪失し、OAUという名の、独立アフリカ諸国政府の代表をもつて構成される、その意味では多くの制約を背負つた凝集性の弱い地域機構を、ほとんど唯一の場として展開されるかたちに固定化されてしまつた。

ニエレレ自身こうしたパン・アフリカニズムの現状を批判的に見て、ふたたび原点ともいふべき一九四五年の第五回パン・アフリカ会議から出発し、合衆国やカリブ海諸国を中心とする非アフリカ世界のアフリカ系人の運動をふたたび戦線のなかに組み入れることによつて、パン・アフリカニズムに非アフリカ大陸的側面を回復し、これをインター・コンチネンタルなアフリカ人・アフリカ系人のイデオロギー運動として再編成しようと狙つたのではなからうか。もしそうであるとすれ

ば第六回パン・アフリカ会議は、二九年の年月を一挙に逆のぼつて一九四五年の第五回パン・アフリカ会議に直結するものとして計画され、開催されたことになるのであり、その意味で、パン・アフリカニズムに新段階を画する会議であるということにもなる。

ただ、こうしたニエレレの姿勢が他の多くのアフリカ諸国から支持されていたか、共感をもつて受けとめられていたかどうか、という点については、むしろ否定的にならざるをえない。なぜなら、第六回パン・アフリカ会議に出席した独立アフリカ諸国の元首は一人もいなかったからである。アフリカではじめて開催された正式のパン・アフリカ会議に、アフリカの国家元首がニエレレ以外に一人も姿を見せなかつたという事実は、まことに皮肉な現象であると同時に、パン・アフリカニズムの将来がかならずしも樂觀を許されないという感じを、われわれにいだかせるのである。

- (1) 第一回パン・アフリカ会議(一九一九年)から第五回パン・アフリカ会議(一九四五年)にいたるデュボイ流のパン・アフリカ会議運動については、小田英郎『増補 現代アフリカの政治とイデオロギー』、慶應通信、一九七五年、第三章、第五章、第六章を参照されたい。
- (2) この独立アフリカ諸国会議の意義については、小田、前掲書、二〇〇～二〇二ページを参照されたい。
- (3) I. Walterstein, *Africa: The Politics of Unity*, New York: Random House, 1967, p. 33. なお、全アフリカ人民会議の意義については、小田、前掲書、二〇二～二〇四ページを参照されたい。
- (4) 小田、前掲資料、一〇三ページ、下段。
- (5) 前掲資料、一〇四ページ、上段。

三、第六回パン・アフリカ会議と合衆国の黒人運動

この第六回パン・アフリカ会議に関して、もうひとつの注目すべき事実は、合衆国から約二〇〇人もの大規模な代表団が会議に参加したことである。かつてデュボイが指導した時代のパン・アフリカ会議を彷彿させるものがある。

合衆国では一九三〇年代にはいるところからパン・アフリカニズム志向は下降しはじめるが、一九六〇年代後半のいわゆる

ブラック・パワールの高まり以後、黒人のあいだに心理的、文化的な面でアフリカへのアイデンティティを強めていく傾向が顕著に見られはじめた。またそれと並行して、合衆国やカリブ海諸国の黒人が、自分たちはアフリカの脱植民地化にどういう役割をはたすべきか、自分たちはアフリカの解放闘争をどう支援すべきか、また独立アフリカ諸国は合衆国の黒人の闘争にどういう役割をはたすべきか、といった問題を鋭く意識しはじめたといわれる。⁽¹⁾

こうした状況のなかで、一九七〇年九月三日から七日にかけてジョージア州アトランタでアフリカ系人民会議が開催されたが、この会議はバラカの位置づけによると、デュボイが招集した第一回〜第四回パン・アフリカ会議にはじまり、エンクルマとパドモア (George Padmore) が牽引力となつて開催された第五回パン・アフリカ会議 (マンチエスター) にいたるパン・アフリカニストの国際会議の歴史的伝統を汲む会議であると同時に、一九六六年 (ワシントンDC)、六七年 (ニューアーク)、六八年 (フィラデルフィア) と続けて開催されたブラック・パワー会議 (Black Power Conference) の発展したものである。バラカによると、これらの会議はすべて、もつとも広義のパン・アフリカニズム、すなわち国際的なアフリカ人の解放運動の一部を構成するものである。⁽²⁾

一九七〇年九月に開かれた前述のアフリカ人民会議は、バラカによれば、ガーヴィー (Marcus A. Garvey)、デュボイ、ケイスリー・ヘイフォード (Joseph E. Casely-Hayford)、ニエレレ、エンクルマ、エライジャ・ムハンマド (Elijah Muhammad)、マルコム X (Malcolm X) といった偉大なアフリカ人、アフリカ系人の思想の現代的適用を再確認したという。またこの会議において、アフリカ大陸のアフリカ人の思想と、アフリカ大陸圏外のアフリカ系人の思想を結びつける必要があることも確認された、という。⁽³⁾ つまりこのアフリカ系人民会議は、独立アフリカ諸国、ならびにアフリカの解放運動を、全アフリカ系人の解放のための前衛と見なし、アフリカ諸国およびアフリカの解放運動を中心的なパワーとして、国際的なアフリカ人・アフリカ系人の復権運動を展開しようという方向性をうち出したわけである。一九七〇年のアフリカ系人民会議の計画委員

会議長をつとめたバラカが同会議を「第一回現代パン・アフリカ会議」と称したのは、そうした理由によるものである。

合衆国が第六回パン・アフリカ会議に送った大代表団は、主としてこのアフリカ系人民会議を組織した黒人運動家からなるが、前述のように彼等の主張はかならずしも第六回パン・アフリカ会議の基調をなしたとはいえず、また彼等が求めているようなインター・コンチネンタルなアフリカ系人の運動は、満足のいくようなかたちで具体化されるにはいたらなかつた。

しかしそれにしても、第六回パン・アフリカ会議の開催それ自体は、むしろこれら合衆国の黒人運動の要求に触発されたという感じが強い。それは合衆国から二〇〇名もの大代表団を組織し、ベネット、サドウカイをはじめとする強力な代表演説者を演壇に送つたことにも表われている。彼等は、この会議からはつきりと形に表われた特別な収獲を手に入れることはできなかつたが、パン・アフリカニズムの戦列のなかでふたたび正統な地位を回復したという点で、非常に大きな果実を手にしたのである。

(1) L. A. Baraka (LeRoi Jones), ed., *op. cit.*, p. vii.

(2) *Ibid.*, pp. vii~viii.

(3) *Ibid.*

四、結 び

以上に述べたところからも明らかなように第六回パン・アフリカ会議を契機として、パン・アフリカニズム運動はたしかに新段階を迎えた。

回顧してみれば、パン・アフリカニズム運動は一九四五年以前はアフリカの外で形成され発展した非アフリカ世界(主としてカリブ海地域および合衆国)のアフリカ系人(黒人)の人種的、民族的差別に対する抗議運動としての性格が強く、また一

九四五年の第五回パン・アフリカ会議を境にその指導権がエンクルマ等の現代アフリカ・ナショナリストの手に引き継がれてからは、アフリカナイゼーションの一端をたどり、アフリカの「独立と統一」を目指す、革命的イデオロギー運動へと発展した。さらに一九五七年三月のガーナ独立を契機として、その展開の舞台をアフリカ大陸圏に限定する方向へと急速に向かい、その成果(きわめて限定された成果)としてOAUを創設するにいたつたものの、離散^{ディアスポラ}の状態にある非アフリカ世界のアフリカ系人の解放という基本的な課題を事実上放棄したに等しい結果を招くことになつた。

しかし一九七四年の第六回パン・アフリカ会議は、ふたたびパン・アフリカニズム運動にその本源性をよみがえらせ、同運動に非アフリカの次元を回復させる契機となつた。そればかりではない。第六回パン・アフリカ会議を境にパン・アフリカニズム運動は単なるアフリカ人・アフリカ系人の運動にとどまらず、より広範な第三世界運動の一構成部分として発展する方向を目指しはじめたのである。

この新しい方向のなかで、パン・アフリカニズム運動は、OAUのレベル、全世界のアフリカ人・アフリカ系人のレベル、第三世界のレベルと、相互に補完的な三層の流れを含みながら、しだいに運動量を増大させていくことになるであろう。